

# 学生相談室におけるグループプログラムの試み

濱田 さつき<sup>1)</sup> 金子 留里<sup>2)</sup> 松高 由佳<sup>3)</sup>

## The Group Programs of a Student Counseling Room

Satsuki Hamada Ruri Kaneko Yuka Matsutaka

### I はじめに

学生相談機関は、高等教育機関の教育において発達促進的、予防教育的役割が求められており、活動の一つに学生を対象とした導入教育や各種授業、心理教育プログラムなどの予防・啓発活動が挙げられている（日本学生相談学会、2013）。

広島文教女子大学（以下「本学」と示す）の学生相談室は、昭和63年に開設し、以来、本学教職員や臨床心理士の非常勤カウンセラーにより個別の心理相談による学生支援に取り組んできた（松高ら、2015）。平成25年度に専任カウンセラーが配置され、非常勤カウンセラーとの二人体制となり人員を充実させたことで、これまで支援活動が不十分であった予防・啓発活動に力を注いできた。その活動の一つとして、平成26年度から「話してスッキリコミュニケーション講座」と題して、コミュニケーションに主眼を置いた、グループ対象のプログラムに取り組んでいる。個別相談の中で休退学に至るケースに出会い、学生一人一人が、問題が大きくなる前に予防する力や、人との関わりの中でよりよい関係を築いていく力を育む場の提供を感じた背景がある。

プログラムの目的は以下の通りとした。

①自分をとり巻く対人関係に関する不安や心配事

を意味あるものとしてグループで体験し、価値観は人それぞれであることを知る。

②これまでの対人関係を振り返り、新たな関わり方を模索していく。

③人との関わりを楽しんでみようかな、楽しめそうだなと思え、大学生活に楽しさを見出す。

本稿では、上述の3点を目的とした、平成27年度に学生相談室において試みたグループプログラムの取り組みを振り返り、今後のグループを対象としたプログラムを実施する上での資料とした。

### II 構造の設定

プログラムを実施するにあたり、構造を以下のように設定した。

#### 1. 1回90分の2回連続プログラム

学内で実施するため、学生が1コマ90分の授業スタイルに慣れていることに配慮した。また、グループで話し合いながら、目的に応じていくには、最低2回の実施は必要と判断した。また、開催時間帯は、開講授業数の少ない枠とした。

#### 2. 前期・後期に2度開催

平成26年度は、後期に1度開催しているが、受講後アンケートに「2回では足りなかった」「また参加したい」という意見が多く寄せられたため、平成27年度は前期・後期にそれぞれ1度ずつ開催することにした。2度開催することで、学生の参加したい時期の選択肢の幅が広がること、前期に

1) 広島文教女子大学学生サポートセンター

2) 武田学園地域連携室

3) 広島文教女子大学心理学科

参加した学生が再度参加しやすくなることをねらいとした。

### 3. コミュニケーションシリーズの展開

前述の2度開催を踏まえ、同じプログラム内容の実施では、次の問題点が考えられた。

- ①変化がなく、魅力に欠ける点（次第に学生の印象に残らない可能性）
- ②前回の参加学生が同じ内容では申込みにくい点（参加者の限定を招く恐れ）
- ③前期と後期では対人関係にも変化が生じてくる時期であるため、扱うテーマが違ってくる点（ずれたテーマの提供）

以上の問題点より、過去の参加の有無に関係なく学生が参加でき、時期に沿った心理的課題をテーマに扱うことの2点が課題として挙がり、コミュニケーションシリーズの展開を試みることにした。

## Ⅲ 方 法

1. 募集対象者：本学在学生
2. 募集定員：前期・後期各12名
3. 募集方法

募集方法は、以下の通りとした。

- (1) 学内掲示板（ポスター、図1～2）
- (2) 学内電子掲示板（メールマガジン）

- (3) 教職員への広報依頼
- (4) ガイダンスでのチラシの配付

### 4. 申込方法

申込方法は、以下の通りとした。

- (1) 申込用紙  
学生サポート課に設置したボックスに投函するか、学生相談室に直接持参とした。

- (2) メール

本学で支給されている筆者のアドレスを申込先とした。

(1)・(2)の申込受付後は、受付完了のお知らせをメールにて送信した。

### 5. ファシリテーター：2名

カウンセラー1名と本学職員1名が担当した。二人は、本学が毎年開催している子育て支援講座のファシリテーターも担当している。

### 6. 倫理的配慮

同意書に沿って口頭で説明を行い、実施内容と研究発表への同意を書面にて得た。

## Ⅳ プログラムの実施内容

ここでは、プログラムの実施内容を紹介する。

### 1. 前期

- (1) 講座名：話してすっきりコミュニケーション講座

**話してすっきり** 学生相談室企画  
**コミュニケーション講座**  
～キャンパスライフに楽しさを～  
人との関わりの中で  
「もっとうるさく言えなかったなあ」  
「なに話そう・・・」  
「話しかけるタイミングが難しい～」  
なんて感じたことはありませんか？  
不安に感じたり、自信をなくしたりするのは、あなただけではありません。  
仲間と一緒にコミュニケーションについて考えてみませんか？

参加者募集！

- 日 時：2015年7月1日・8日（水） 2回だよ！  
15時45分～17時15分（4コマ目）
- 場 所：心理教育相談センター2階  
（駐輪場後ろの建物、外階段で2階に上がります）
- 対 象：コミュニケーションに関心がある人、どなたでも
- 定 員：12名（先着順）
- 進行役：浜田・金子 飲み物とお菓子をご用意します
- 締切日：6月26日（金）

図1 前期ポスター

学生相談室主催  
2015 第2弾！  
**話してすっきり**  
**コミュニケーション講座**  
会話のいきちがいのこんな時どうする？  
参加者募集！

人との会話のちょっとしたいきちがいのから、  
「どうしよう？」  
「会話が続かない！」  
「気まずい！」なんて感じることはありませんよ。  
一人で抱え込まず、今より少しでも気持ちよく話せるようなコツ  
を仲間と一緒に探っていきましょう。

- 日 時：2015年10月28日・11月4日（水） 2回だよ！  
15時45分～17時15分（4コマ目）
- 場 所：心理教育相談センター2階  
（駐輪場後ろの建物、外階段で2階に上がります）
- 対 象：コミュニケーションに関心がある人、どなたでも
- 定 員：12名（先着順）
- 進行役：浜田・金子 飲み物とお菓子をご用意します
- 締切日：10月23日（金）

図2 後期ポスター

—キャンパスライフに楽しさを—

(2) 日 時：平成27年7月1日・8日（全2回）

15時45分～17時15分

(3) 参加者：12名（1回目：12名，2回目：10名）

表1に，参加者内訳を示す。

表1 前期参加者内訳

学年	人	%
1	8	66.6
2	2	16.7
3	2	16.7
計	12	100.0

注)率は，参加者数に対する割合を示す。

(4) 各セッション構成

＜前期：第1回テーマ＞

新しい出会いそして普段の人との関わりについて考える

〈学習目標〉

- ①互いに知り合う。
- ②コミュニケーションの中で気になる事や，上手くなりたいた事はどんなことを振り返る。
- ③一番気になる内容について，どういう事なのか，普段の関わり方について，取り組めそうな事について考える。

〈達成目標〉

話すことは楽しいなと思え，悩んでいるのは自分だけではないという気持ちになる。

〈プログラム内容〉

- ①オリエンテーション  
目的，進行役の紹介，プログラムの流れ，ルールの説明
- ②チェックイン  
自己紹介（名前・所属・学年・今の気持ちを天気で表す），なんでもチェーン，共通点を探せ
- ③参加理由（動機）を共有する  
参加理由を互いに聞き合い，付箋に書き出していく。特に一番気になる内容については丸をつけ，書き出した付箋は紹介しながら，テーマごとにまとめ，マーカーでくくる。
- ④一番気になることについて話し合う  
付箋に丸をつけた内容について，グループで話し合う。他のグループの模造紙をみてシェアリング。

⑤振り返りと一人ひと言

＜前期：第2回テーマ＞

自分のコミュニケーションの癖を知ろう

〈学習目標〉

- ①さらに互いに知り合う。
- ②ゲームを通したコミュニケーションを体験する。
- ③自分のコミュニケーションの癖を見つけ，次の一歩をどうしていくのかを考える。

〈達成目標〉

コミュニケーションに対する見方が少し変わって，より良い関係作りのために，自分にも何かできるかもしれないという気持ちになる。

〈プログラム内容〉

- ①オリエンテーション  
前回の振り返り，今日の流れ，ルールの説明
- ②チェックイン  
一人ひと言，ピクニックバスケット
- ③コミュニケーションゲーム  
ペアコミュニケーション  
⇒3つのテーマについて制限時間内に聞き合う。
- ④自分の癖を強みにする  
コミュニケーションに対しての自分の癖を書き出し，他のメンバーから，「癖＝自分の強み」となるヒントをもらう。相手のヒントを自分がどう感じたか用紙に書き出し，紹介する。他のグループのワークシートをみてシェアリング。
- ⑤振り返りと一人ひと言
- ⑥学内で話せる場の案内

## 2. 後期

(1) 講座名：話してすっきりコミュニケーション講座  
—会話のいきちがいこんな時どうする？—

(2) 日 時：平成27年10月28日，11月4日（全2回）  
15時45分～17時15分

(3) 参加者：6名（1回目：6名，2回目：3名）

表2に，参加者内訳を示す。

表2 後期参加者内訳

学年	人	%
1	3	50.0
2	2	33.3
3	1	16.7
計	6	100.0

注)率は，参加者数に対する割合を示す。

## (4) 各セッション構成

＜後期：第1回テーマ＞  
新しい出会い そして普段の人との関わりについて考える

## 〈学習目標〉

- ①互いに知り合う。
- ②会話の中で気になる事や困り事について振り返り、自分の課題を認識する。
- ③他の人の様子について知る（自分だけではない体験）。

## 〈達成目標〉

人と話をする事で、他の人の様子を知り、自分の課題が少しでも見えるような気がする。

## 〈プログラム内容〉

- ①オリエンテーション  
目的、進行役の紹介、プログラムの流れ、ルールの説明
- ②チェックイン  
他己紹介（名前・所属・学年・このグループプログラムに期待するもの）
- ③会話の中で困っていることを聞き合う。  
コミュニケーションに関して気になったり、困っていることについて、ペアでどうということなのか話し合う。一連の作業を、ペアを変えて繰り返す。
- ④他の人の様子を知る  
どうということが話し合われたのか、紹介し、皆で気付きなどを話し合う。
- ⑤振り返りと一人ひと言

＜後期：第2回テーマ＞  
これからの人との接し方について考える

## 〈学習目標〉

- ①互いにさらに知り合う。
- ②「コミュニケーションのための10箇条」の中から自分のテーマを見つける。
- ③テーマの中でこれから自分ができそうな接し方を考える。

## 〈達成目標〉

人との会話を気持ちよく進めるために、自分な

りに出来そうなことがわかったような気がする。  
〈プログラム内容〉

- ①オリエンテーション  
前回の振り返り、今日の流れ、ルールの説明
- ②チェックイン  
一人ひと言、ピクニックバスケット
- ③コミュニケーションゲーム  
ペアコミュニケーション  
⇒3つのテーマについて制限時間内に聞き合う。
- ④会話の中でこれから自分ができるような接し方を考える  
「コミュニケーション能力のための名言10箇条」を読み、自分の心に残った内容や会話の際に気をつけたいこと、意識したいことなど、一つ選ぶ。なぜそれを選んだのか互いに聞き合い、選んだ内容をどう自分に活かしていくのか、会話の中で出来そうなこと、心がけたいことを考える。
- ⑤振り返りと一人ひと言

## V プログラム作成で配慮・工夫した点

ここでは、プログラム作成において配慮および工夫した点を紹介する。

## 1. ルールの明示

プログラムにて学生が安心して話せる場を提供するために、ルールを以下のように明示した。

- ①全員がおしゃべりしましょう
- ②相手の話は聞きましょう
- ③ここでの話は外へは持ち出さない
- ④質より量
- ⑤携帯・スマートフォンはマナーモードかオフ

## 2. 視覚化

プログラム進行の説明において、「紙ポ」と呼ばれるパワーポイントの代わりに紙に手書きをした用紙を多用し、視覚的にも理解しやすいように配慮した。

## 3. コミュニケーションゲームの導入

前期・後期の第2回目において、コミュニケーションを意識したゲーム、「ペアコミュニケーション」を取り入れた。これは、お題について制限時間内に互いに聞き合うという内容である（例：「今日の朝ご飯」「最近、楽しかったこと」「私のストレス発散方法」について、最初2つのお題は1

分以内で、最後のお題は2分以内で聞き合う)。ねらいは、以下の3点である。

- ①1対1でバランスのよい聞き合う関係を育む。
- ②好意的な態度が、発言を促進させることを共有する。
- ③話が長い、あまり発言しないなど、自分のコミュニケーションの癖に気づき、バランスを整える必要性を共有する。

4. 同じテーマについてペアを変えて繰り返し二人で話し合うプログラムの導入 (図3)

体験学習プロセス (体験→認識：何が起きたのか?→関連づけ：それはどういうことなのか→応用：これからどうするのか?) を基に (Catano, 2002), 体験から関連づけまでのプロセスを図3のプログラムとして導入した (後期第1回目)。ここでのポイントは、学生に自らの体験を相手に伝える際に、相手に伝わりやすいように意識することを投げかけたことと、ペアを変えて繰り返し体験することの2点である。これにより、自らの課題をより整理しやすくなり、コミュニケーションのトレーニングにも結びつくと考えた。

5. コミュニケーションで心掛けたい事柄の提示 (図4)

前述4のプロセスを踏まえ、体験学習サイクルの「応用：これからどうするのか?」の部分については、図4のプログラム内容とした (後期第2回目)。ここでのポイントは、ファシリテーター側より「コミュニケーション能力のための10箇条」と題して、コミュニケーションで心掛けたい事柄

内容	準備物	実施状況
【1】【会話の中でこれから自分ができるような接し方を考える】	・コミュニケーション能力のための名言10箇条(1枚)  ・A4用紙 ・マーカー	グループ
① 「コミュニケーション能力のための名言10箇条」をPaが一通り読み、「自分の中で読み直して見て」と教示する。		
② 10箇条の中で、自分の心に残った内容(共感)、会話を取る時に気をつけたいこと、意識したいことなど、1つ選び、○をつける。		ペア作業
③ ②で、なぜ、それを選んだのか、互いに聞き合う。		一人作業
④ 選んだ内容をどう自分に活かしているのか、会話の中でやれそうなこと、やってみようかな、出来そうなこと、心掛けたいことを考えて、用紙に書き出す。		グループ
⑤ 用紙に書いた内容を基にディスカッション。		
⑥ 感想(話し合っの感想や気づきなどを記入する。		

図4 後期第2回目プログラム内容 (一部抜粋)

を10項目提示し、学生それぞれが自らの課題解決に応用できる手だてを認識しやすくしたことである。併せて、課題解決は一つではなく、より多くあることを知るきっかけにも繋がると考えた。

6. 学内コミュニティの場の情報提供

プログラムの最後に学内で気軽に利用できる場所 (学生相談室、保健室、就職課、ボランティアコーナー) を紹介し、学内コミュニティの情報提供を行った。

Ⅵ アンケート

1. 手続き

受講前・受講後に集合調査形式によるアンケート調査を実施した。受講前アンケートは、1回目のプログラム開始前に実施し、受講後アンケートは、1回目・2回目それぞれプログラム終了後に実施した。また、倫理的配慮として、回答は無記名式であること、調査への参加は任意であり、不参加により不利益が生じることはないことを紙面に明記し、口頭でも説明を行った。

2. 質問紙構成

質問紙の構成は、以下の通りである。

(1) 受講前アンケート

- ①学生相談室主催のグループプログラムの参加回数 <設問内容>学生相談室主催のグループプログラムの参加は何回目ですか?

内容	準備物	実施状況	
【1】【会話の中で困っている事を聞きあう】	・用紙(A4) ・マーカー	個人作業	
① 「コミュニケーションに関して気になったり、困ったなあ」と思うことを思い出し、A3用紙の左側に書き出す。思いつものはいくつでもよい。			
② ①で書いた用紙を見せて、困りごとについてペア(話し役、聞き役)で話してみる。「どう困り事なのか」		ペア作業	
③ 話し合っで感じたことをA3用紙の右側に記入する。		困っていること	感想
④ ②③を相手を変えて行う。(別のペアで2回)  <留意点>相手に伝わりやすいように話すことを意識してみる。			
⑤ 今回のワークをして、今、感じていることを用紙に書く。			

図3 後期第1回目プログラム内容 (一部抜粋)

②その他のグループプログラムの経験の有無  
 <設問内容>その他のグループプログラムの経験はありますか？

③プログラムを知り得た経緯  
 <設問内容>どこでプログラムを知りましたか？

④参加動機  
 <設問内容>なぜ参加しようと思いましたか？

⑤参加するにあたっての今の気持ち  
 <設問内容>プログラムに参加するにあたって、今の気持ちをお聞かせください。

⑥その他  
 <設問内容>その他、何でも自由にお書きください。

以上、①と②の項目については、それぞれ「1回目」「2回目以降」、「あり」「なし」の2件法で、③から⑤の項目については、当てはまる全てを選ばせる複数回答で、⑥の項目については、自由回答法で尋ねた（回収率100%）。

## (2) 受講後アンケート

①満足度  
 <設問内容>満足できましたか？

②役立ち度  
 <設問内容>役に立ちましたか？

③意思の伝達度  
 <設問内容>話すことはできましたか？

④新たな気付きや学び度  
 <設問内容>新たな気付きや学んだ事がありましたか？

⑤リピート度（2回目のプログラム終了後の質問）  
 <設問内容>また参加したいと思いますか？

⑥その他  
 <設問内容>その他、何でも自由にお書きください。

以上、①から⑤の項目については、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5段階評価で、④の項目については、「その理由」についても自由記述による回答を求めた。⑥の項目については自由回答法で尋ねた（回収率100%）。

## 3. 結果と考察

受講前アンケートの結果を表3, 4, 6, 7, 図5～7, 10～12に示す。「参加回数」は、学生相談室主催および他のグループプログラムの両方において、前期・後期とも初参加の学生が多かった（表3, 4, 6, 7）。参加学年は1年生が多いことやグループプログラムは平成26年度からの取り組みであ

るため、予想された結果と言える。「参加経緯」について最も高い割合を示したのは、前期は「紹介・案内」で58.3%、後期は「ポスター」で66.7%であった（図5, 10）。前期は、チューターガイダンスにて案内した結果が反映されたものと推測される。また、ポスターによる案内は有効であることが示された。「参加動機」について最も多くの者が選択した項目は、前期は「コミュニケーションに苦手意識や不安があったから」で50.0%、後期は「コミュニケーションに苦手意識や不安があったから」と「コミュニケーションのスキルアップのため」でそれぞれ83.3%であった（図6, 11）。全般的にコミュニケーションに対する不安の高い学生が参加していたことが示され、後期はその不安や苦手意識を克服したい学生が多く参加していたことが明らかになった。後期の講座名は「会話のいきちがい こんな時どうする？」と、前期よりスキル面を前面に押し出した内容となっているため、その反映と推測される。いずれにせよ、実施者側の意図した学生が、多く含まれていたと言えるだろう。「受講前の気持ち」については、前期・後期とも「楽しみにしている」項目が最も高く、プログラムに対する期待の高さが伺えた（図7, 12）。

次に、受講後アンケート結果を図8, 9, 13, 14に示す。「意思の伝達度」以外の「満足度」、「役立ち度」、「新たな気付きや学び度」、「リピート度」については、「非常にそう思う」「まあそう思う」の項目を合せ、前期・後期全てのセッションにおいて100%であった。一方、「意思の伝達度」については、前期において「どちらともいえない」「あまりそう思わない」の回答が示された。しかし、満足度は高い結果から、あまりしゃべらなくても心地よい場として機能していた可能性が推測された。

最後に、「新たな気付きや学んだ理由」について最も多く寄せられたのは、前期は、悩んでいるのは自分だけでない体験であり、後期は、スキル面に関する感想であった。学生ニーズに貢献できる結果が得られた一つの目安になると言えるだろう（表5, 8）。

表3 前期：学生相談室主催の参加回数

1回目	2回目
12 (100.0%)	0 (0.0%)

注)率は、参加者数に対する割合を示す。

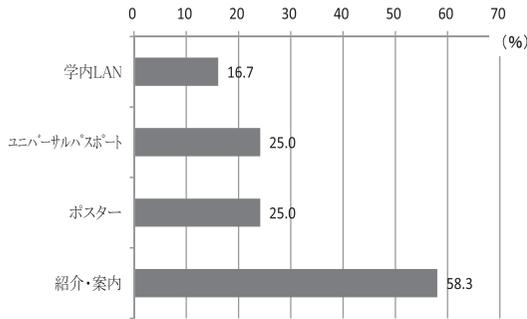


図5 前期：参加経緯（複数回答）

表4 前期：その他のグループプログラムの参加回数

あり	なし
1 (8.3%)	11 (91.7%)

注)率は、参加者数に対する割合を示す。

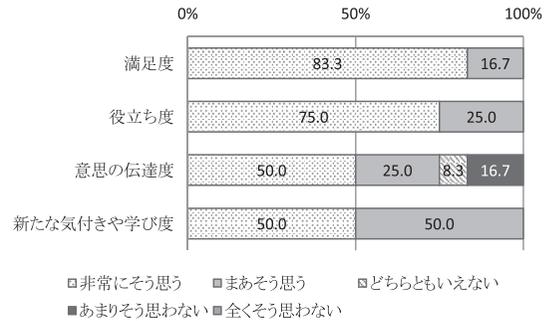


図8 前期：1回目受講後アンケート

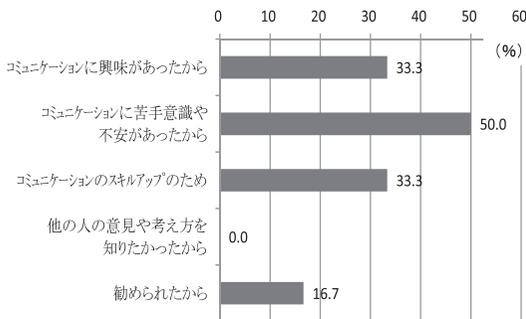


図6 前期：参加動機（複数回答）

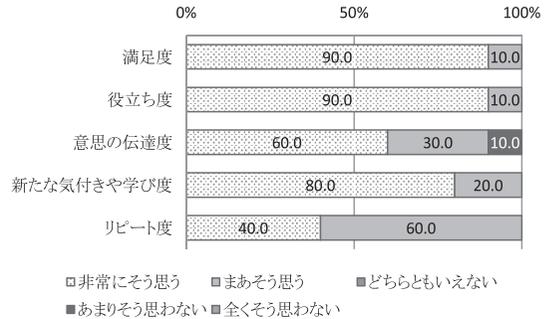


図9 前期：2回目受講後アンケート

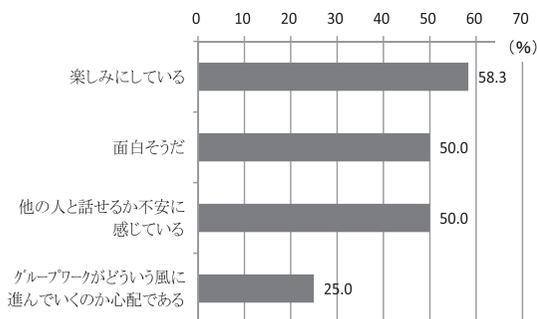


図7 前期：受講前の気持ち（複数回答）

表5 前期：新たな気付きや学んだ理由（自由回答）

内容
・同じ悩みを持っている人が多いと知った(複数回答)
・話すことで気分が楽になった。
・みんなの意見が聞けたから(複数回答)。
・自分にも出来そうかなと思ったから。
・話すのに癖があるんだと思った。
・話し合うことで自分のことが分かった(複数回答)。
・自分の意見が言えたから。

表6 後期：学生相談室主催の参加回数

1回目	2回目
4 (66.7%)	2 (33.3)

注)率は、参加者数に対する割合を示す。

表7 後期：その他のグループプログラムの参加回数

あり	なし
1 (16.7%)	5 (83.3%)

注)率は、参加者数に対する割合を示す。

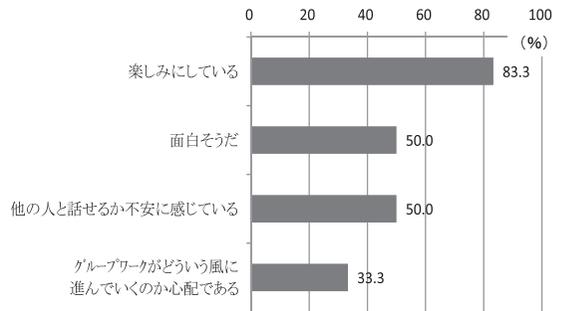


図12 後期：受講前の気持ち（複数回答）

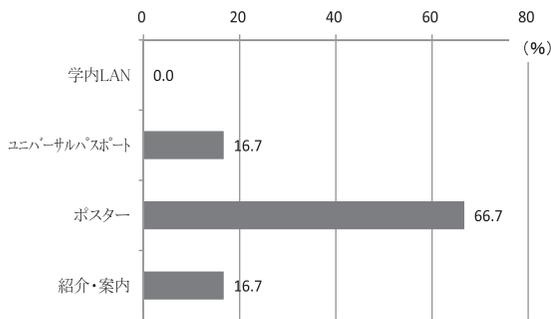


図10 後期：参加経緯（複数回答）

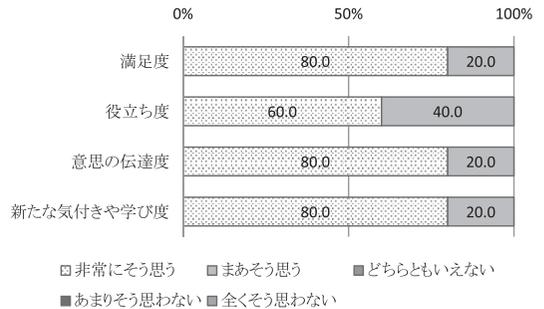


図13 後期：1回目受講後アンケート

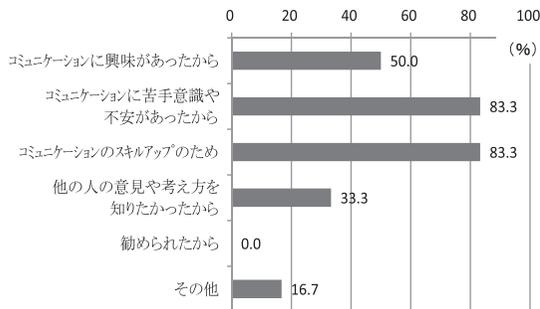


図11 後期：参加動機（複数回答）

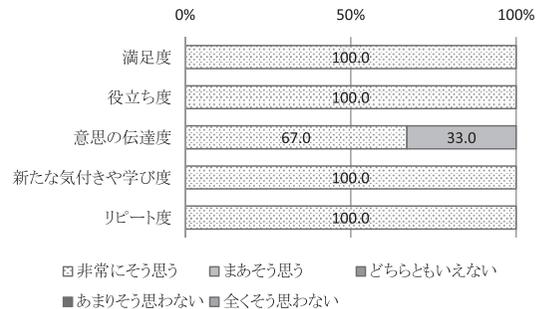


図14 後期：2回目受講後アンケート

表8 後期：新たな気づきや学んだ理由（自由回答）

内容
・リラックスして話せたから。
・会話が下手でも、相手に伝えることが出来たから。
・話し方を学べたから。
・合わない人と話したことがない事に気づいたから。
・ひと手間の大切さに気づくことが出来たから。
・話し方以外にも相槌や、相手のことを考える気持ちも大切ということを学べたから。

## V まとめと今後の課題

以上、平成27年度のグループプログラムの取り組みについて述べてきた。今回の取り組みから今後の課題を考えたい。

### 1. 学生の背景を考慮した言葉の投げかけ方

グループプログラムでは、ファシリテーターが介入しないと、グループの話題が広がらない場面が確認された。平成27年度グループプログラムの参加者の多くは1年生・2年生といった低学年であった。高校まで受け身の授業が中心であった学生にとって、参加型のワークは不慣れであったことが推測される。ベネッセ教育研究開発センター(2012)は、「大学生の学習・生活実態調査」の結果から、高校までの受け身の授業形態の背景により学生の依存度の高さを指摘しており、今回もファシリテーターに依存していた可能性は考えられる。ファシリテーターは、あくまでも進行役であるが、学生にとっては、講義形式のような見えない関係性が存在していたことが推測され、ファシリテーターの言葉の投げかけ方が、受け身の姿勢の学生に沿ったものではなかった可能性は否定できないだろう。学生が主体的な関わりへと少しでも成長を促進できるよう、言葉の投げかけ方にはより一層の工夫が求められると考える。

### 2. 開催時期・実施回数

今年度は、前期と後期に2度開催したが、後期については、参加申込数が定員に達していない。後期は、12名に対して9名の申込みがあった。しかし、実際の参加者数は6名と減少している。その背景要因については、学内のイベント関係や開催時期が考えられる。後期は、前期より学科や部署のイベント等が活発になりやすく、学生相談室のイベント情報への関心が薄れやすくなりやすい可能性がある。さらに、後期は11月という季節の変わり目の時期での開催であったため、プログラム当日に体調不良による欠席者が数名確認された。今後の改善点としては、後期に開催を組み込む場合は、学内のイベントとの調整や時期を考慮する必要があるだろう。

また、今回は1回90分の2回連続セッションを基本とする構造で実施した。しかし、学内イベントやアルバイトといった個々の事情により、連続参

加が難しい学生がおり、前期・後期の両方において参加者数が2回目で減少し、人数の維持が課題として残された。背景要因としては、先ほど述べた物理的側面以外にも何らかの心理的側面も考えられ、今後検討していく必要があるだろう。

### 3. 多様なプログラムの展開

日本学生相談学会(2010)によると、学生相談機関で実施されているグループを対象とした取り組みとしては、①エンカウンター・グループ、②心理教育プログラム、③体験・教室、④談話室の運営の4つに分類される。今年度、本学学生相談室はコミュニケーションに主眼を置いたグループプログラムを実施し、分類としては②心理教育プログラムに位置づけられるが、今後は、コミュニケーション以外にも多様な学生のニーズに貢献できるプログラムの展開を考えていきたい。例えば、作品を通して自己理解を深めるコラージュ療法や学内の他部署との合同企画などが考えられるだろう。

今回、平成27年度のグループプログラムの取り組みについて振り返り、検討を行った。本学学生相談室のグループを対象としたプログラムの取り組みは、始まったばかりである。本稿が今後のグループ活動の発展の一助となれば幸いである。

### 【謝辞】

グループプログラムを実施するにあたり、ご支援いただきました、広島文教女子大学学生サポートセンターおよび、学生相談室運営委員の先生方に心より感謝申し上げます。

### 【文献】

- 日本学生相談学会(2013). 学生相談機関ガイドライン <http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/2013/07/71d76bdabf2d5f7c3c4cdc615c272a5a.pdf>
- 松高由佳・濱田さつき・鈴木秀規(2015). 学生相談室の利用状況と今後の課題 広島文教女子大学高等教育研究, 創刊号, 99-106.
- Janice, W. C (著), 三沢直子(監修), 杉田真・門脇陽子・幾島幸子(監訳)(2002). 親教育プログラムのすすめ方～ファシリテーターの仕事～. ひとなる書房

日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会  
(2010). 学生相談ハンドブック. 学苑社  
ベネッセ教育総合研究所 (2012) 第2回 大学生  
の学習・生活実態調査報告書 [2012年]